鉄砲洲神社素読論語　解説

（平成 24 年 3 月 9 日）

郷党 第十

【四】公門に入るときは、鞠躬如たり、容れられざるが如し。立つときは門に中せず。行くときは閾を履まず。位を過ぐるときは、色勃如たり、足躩如たり、其の言うこと足らざる者に似たり。斉を摂げて堂に升るときは、鞠躬如たり、氣を屏めて息せざる者に似たり。出でて一等を降るときは、顔色を逞べて怡怡如たり。階を没して趨り進むときは、翼如たり。其の位に復るときは、踧踖如たり。

宮殿の門に入る時は、身を屈めてそおっと通るような雰囲気、なかなか入れないような氣持ちで、そおっと通り抜ける努力をする。門の真中には立たない。行く時は、しきい（門が閉まる時に下に横たわっている柱のようなもの）を踏まないで乗り越えて入って行く。宮殿内に入る時には真中を通らず、真中には立たないで、しきいも踏まないで通るのが、その時代の礼儀です。

君主が決まって座られる場所を通る時は、顔色がサッと変わります。それぐらい君主を重く受け止めていると捉えます。足はためらいがちにゆっくりと進み、言葉少なく、または言葉が出せない状況になる。両手で袴を抱えあげて君主のおられる堂に恭しくそおっと登って行き、君主に拝謁をする時には、氣持ち穏やかに息をしていないかのような形で進んでゆく。堂から退出して階段を一段おりる時には、緊張を緩め顔色がほぐれて緩やかに柔らかくなり、のびのびした顔色になる。階段をおりきって小走りに進む時には、恭しくつつしんで進む。自分がいた場所に帰る時には、恭しい面持ちでそっと帰って行く。

孔子が君主のおられる宮殿に入って行き、どのような動作、態度をとるのかというのを細かく説明をし、記録しているものです。このぐらい礼儀作法をやかましく叩き込まれれば、のんびりした人でも、それなりに見えるのではないかという氣がします。

今の時代にあてはめてみれば、学校の卒業式の時、国旗を掲げ国歌を歌う時は必ず立って礼を尽くす。オリンピックの時に優勝した国の国旗があがり国歌が流れる時は、ふつう観客も立って礼を尽くすものだけれども、日本の子供達はそのような礼儀は教わっていないし、また学校の先生達も一部の人達が座ったままで立たない。これは日本中で物議をかもしだしています。

孔子が今の日本の状況をみたら、けして良いとは言わないでしょう。あれだけ礼儀を尽くせと言っていますから…。